



防衛研究所

The National Institute for Defense Studies

## 「定例化された」中露共同飛行：次はいつ行われるのか

地域研究部中国研究室 岩本 広志

NIDS コメンタリー

第 231 号 2022 年 7 月 14 日

中国とロシアの軍用機による我が国周辺での長距離共同飛行がたびたび行われている。2022 年 5 月 24 日に確認されたもので 4 回目である。これに関して筆者は、2021 年 11 月に実施された第 3 回目を以て、「定例化された」と指摘した<sup>1</sup>。「定例化された」とはどういうことなのか、そして次はいつ、どのように行われるのか。本稿では、これまでの飛行の実績と中国側の発表等を確認し、簡単な分析を試みる。

### 中露共同飛行の概要と傾向等

中国とロシアは、2019 年に初めて我が国周辺での共同飛行を実施して以来、これまでに 4 回、同種の行動を行ったことが確認されている。それらを簡単にまとめたのが下の表である。

年月日	機種等	備考
2019年 7月23日 (火)	中国 H-6 爆撃機 2 機 ロシア Tu-95 爆撃機 2 機	同時期にロシア A-50 早期警戒管制機 1 機が竹島領空を侵犯
2020年12月22日 (火)	中国 H-6 爆撃機 4 機 ロシア Tu-95 爆撃機 2 機	
2021年11月19日 (金)	中国 H-6 爆撃機 2 機 ロシア Tu-95 爆撃機 2 機	
2022年 5月24日 (火)	中国 H-6 爆撃機 2 機 ロシア Tu-95 爆撃機 2 機	左記中国の H-6 爆撃機 2 機は途中で、新たに飛来した別の中国の H-6 爆撃機 2 機（推定）と交代 また、同日、ロシアの IL-20 情報収集機 1 機が北海道礼文島沖～能登半島沖の公海上を飛行

出所：統合幕僚監部 HP（以下「統幕 HP」）より作成

これまで 4 回の飛行で、同一年内で行われたものはないが、それぞれの間隔は概ね 1 年半、1 年、半年と短くなってきている。4 回のうち 2 回、ロシアの早期警戒管制機および情報収集機の活動も確認されており、第 1 回目と同時に活動が確認された A-50 は、Tu-95 の飛行を支援していたとも指摘されている<sup>2</sup>。他の特徴的な事象としては、第 4 回目は中国機の交代が確認されている。また、QUAD 首脳会合が開催されている最中に行われたことについて、我が国に対する示威を意図したものであり、これまでと比べ挑発度を増すものと指摘されている<sup>3</sup>。

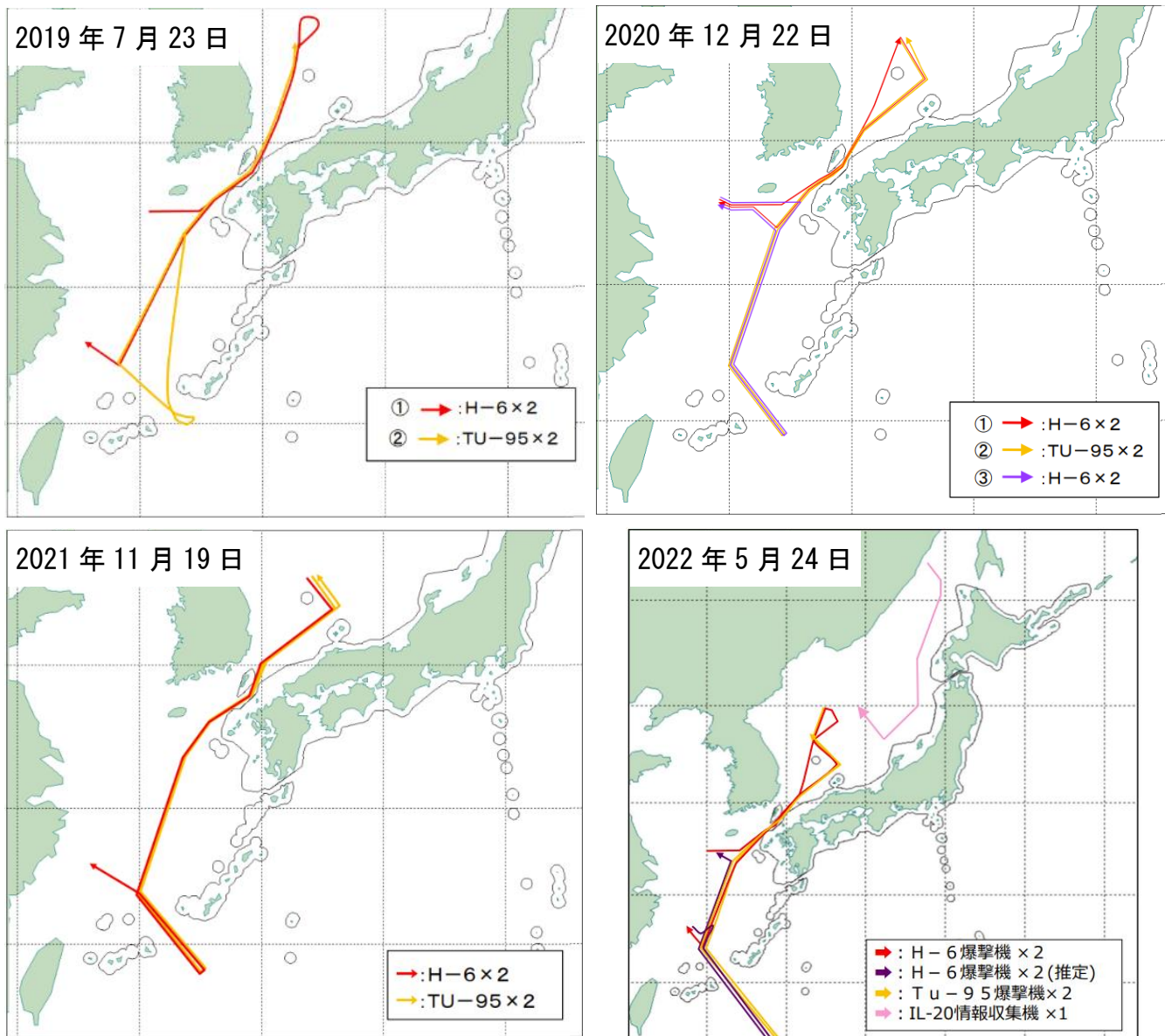
<sup>1</sup> 防衛研究所『東アジア戦略概観 2022』88 頁。

<sup>2</sup> 防衛省『令和 4 年版防衛白書』214 頁。

<sup>3</sup> 防衛省 [https://www.mod.go.jp/j/press/kisha/2022/0524b\\_r.html](https://www.mod.go.jp/j/press/kisha/2022/0524b_r.html)

各飛行の航跡等

これまで確認された 4 回の飛行の航跡は以下の通りである。



出所：統幕 HP より作成

これら航跡図に共通するのは「日本海～東シナ海～沖縄本島・宮古島間を通過」である。我が国に対する示威と考えられるが、爆撃機のための共同飛行であり戦術的には「単調」ともいえる。中国機は日本海上空で空中待機をしており、南下してきたロシア機と合流して編隊飛行をしているものとみられる。

今後、我が国周辺を一周する経路での飛行を含め、航跡の大きな変化や、護衛の戦闘機の随伴、空中給油機、管制機の随伴する飛行パターンなどが認められるようになれば、新たな段階へ移ったものとして認識する必要があるだろう。

## 各飛行後の発表内容等

当該共同飛行は「聯合空中戦略巡航」と称され、実施後、中国からは公式の場で以下のように発表されている。

年月日	発表の形式等
2019年 7月24日（水）	国防白書の発表に伴う記者会見（記者からの質問に答える形） <sup>4</sup>
2020年12月22日（火）	「中露両軍は第2回共同空中戦略巡航を実施」と題する国防部 HP の記事 <sup>5</sup>
2021年11月19日（金）	「中露両軍は2021年度共同空中戦略巡航を実施」と題する国防部 HP の記事 <sup>6</sup>
2022年 5月24日（火）	「中露両軍は共同空中戦略巡航を実施」と題する国防部 HP の記事 <sup>7</sup>

出所：筆者作成

これらの発表時はいずれも、当該飛行が「年度の計画内」である旨が表明されていたが、この表現は中国が軍事行動を行った際に多用されるものであり、「特別なことを行ったわけではない」との意を表していると思われる。

3回目の飛行では、「初めて」「第2回」と同様の飛行を行ったことについて、それまでのように回次というのではなく「2021年度」という表現が用いられたことから、年度単位で「定例化された」と捉えることができた。一方、発表された内容を見ると、第3回目までは、1回目、2回目とともに、日付、双方の機種・機数、飛行空域、パートナーシップの関係の発展、協力のレベルや行動能力の向上、グローバル・戦略的な安定を守る、第三者に向けたものではない、などということが含まれていたが、第4回目では簡潔に、「中露両軍の年度の軍事協力計画に基づき、5月24日、両国空軍は日本海、東シナ海、西太平洋上空で例行性聯合空中戦略巡航（ママ）を実施した」だけであり、文字数にしても従来の約4分の1であった。そして4回目で初めて、「定例化」を表す「例行性」という表現が用いられた。さらに、初めて「第三者に向けたものではない」ということへの言及がされなかった。また、「2022年度」という表現も用いられていない。これらのことから、今後、我が国への示威を明確に意図した飛行が、「第三者に向けたものではない」などという釈明なしに行われる蓋然性が高まったとみることができよう。これまでの周期から、それは年内にも行われる可能性があり、そうすれば初の同一年内での複数回実施ということになる。

## 結論

中露両国による長距離共同飛行は、中国側からの発表をみる限り、4回目を以て決定的に定例化されたと指摘できる。また、過去4回の実施の間隔は徐々に短くなってきており、そして挑発度は増している。

ロシアがウクライナを侵攻したことに関し、中国は対露制裁に加わることもなく、むしろロシアと歩調を合わせ、両国の戦略的協力の緊密化などを表明している<sup>8</sup>。我が国としては安全保障上の取り組みを強化せざるを得ないが、しかしそのことを口実に、中露が更なる示威に出てくる可能性も考えられる。

<sup>4</sup> 中国政府 [http://www.gov.cn/xinwen/2019-07/24/content\\_5414317.htm](http://www.gov.cn/xinwen/2019-07/24/content_5414317.htm)

<sup>5</sup> 中国国防部 [http://www.mod.gov.cn/topnews/2020-12/22/content\\_4875907.htm](http://www.mod.gov.cn/topnews/2020-12/22/content_4875907.htm)

<sup>6</sup> 中国国防部 [http://www.mod.gov.cn/topnews/2021-11/19/content\\_4899150.htm](http://www.mod.gov.cn/topnews/2021-11/19/content_4899150.htm)

<sup>7</sup> 中国国防部 [http://www.mod.gov.cn/topnews/2022-05/24/content\\_4911444.htm](http://www.mod.gov.cn/topnews/2022-05/24/content_4911444.htm)

<sup>8</sup> 人民網（日本語版） <http://j.people.com.cn/n3/2022/0616/c94474-10110580.html>

次の中露両国による長距離共同飛行は、年内に、何らかの政治日程に合わせる形で、はっきりと我が国に向けたものとして、攻勢性を増して行われる可能性がある。

プロフィール

profile

地域研究部

中国研究室

3等陸佐 岩本 広志

専門分野：中国の軍事動向、中国の軍民融合

本欄における見解は、防衛研究所を代表するものではありません。  
NIDS コメンタリーに関する御意見、御質問等は下記へお寄せ下さい。  
ただし記事の無断転載・複製はお断りします。

防衛研究所企画部企画調整課

直 通：03-3260-3011

代 表：03-3268-3111（内線 29177）

F A X：03-3260-3034

※ 防衛研究所ウェブサイト：<http://www.nids.mod.go.jp/>